

〈コラム1〉

五條橋擬宝珠と名古屋城下町

木村 慎平

清須越し

慶長十五年（一六一〇）に始まる名古屋城普請は、軍事施設としての名古屋城の起源であるだけでなく、新たな城下町・名古屋の誕生をも意味していた。周知のとおり、名古屋築城以前における尾張支配の拠点は清須であり、新たに設けられた名古屋城下には徳川義直の家臣となる武士たちだけでなく、有力な商人や寺社までもが清須から移転した。のちに「清須越し」と称されるこの都市移転は有名だが、それを具体的に物語る「物証」はほとんど残されてはいない。そうしたなかで、名古屋城が所蔵する「五条橋擬宝珠」は、清須越しを物語る貴重な遺産である（図1）。



図1 五条橋擬宝珠
名古屋城総合事務所蔵

五条橋とは、名古屋築城とともに城下町西端に開削された運河・堀川にかかる橋であり、この擬宝珠は五条橋が昭和十三年（一九三八）に今の橋に架け換えられるまで、実際に橋の欄干に据えられていた。これらの擬宝珠は、もともと清須を流れる五条川にかかる「五条橋」に据えられていたが、清須越しにもなつて堀川に据え直されたのである。

現在、名古屋城には五条橋擬宝珠が計六基伝来している。そのうち四

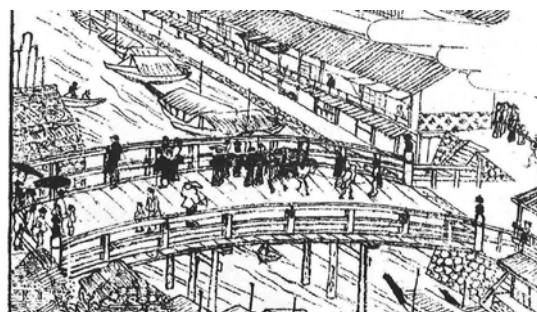


図2 江戸時代の五条橋 『尾張名陽図会』より
（愛知県郷土資料刊行会、1971年）



図3 明治～昭和初期の五条橋
欄干中央にも擬宝珠が見える

基の胴部には「五条橋」「慶長七年壬子」「六月吉日」の銘が刻まれている。名古屋城普請が始まるのは慶長十五年であるから、これらの擬宝珠はそれより八年も前に制作されており、清須越しの伝承を裏付けている

江戸時代後期に尾張藩士の高力種信が著した『尾張名陽図会』には、堀川に架かる五条橋の挿絵が掲載されている（図2）。それを見ると擬宝珠は欄干の端に四基据えられている。したがって江戸時代には擬宝珠は四基のみであり、これが銘のある四基に当たると考えられる。なお、銘のない一基は、明治時代に橋を架け換えた際に新たに据えられたと考えられる（図3）。

五条橋と伝馬橋

江戸時代、堀川には俗に「堀川七橋」と呼ばれる七本の橋が架けられていた。北から順に五条橋、中橋、伝馬橋、納屋橋、日置橋、古渡橋、新橋である。『尾張名陽図会』『尾張名所図会』において、これらの橋に擬宝珠が描かれているか否かを調べると、擬宝珠が確認できるのは五条橋と伝馬橋のみであり、銘や由緒まで記さ

れるのは五条橋のみであった。このことは、二つの橋が七橋のなかでも特異な位置づけを与えられていたことを示唆しているのではないか。

実際の交通路としてみると、美濃路を経て名古屋城下に入る者が堀川を渡ろうとするとき、最初の橋が五条橋であり、ここを渡って京町筋を東に進むと町人地の中心・本町一丁目につながる。ここで本町通を南(右)に曲がれば熱田へ至り、北(左)に曲がれば名古屋城三之丸の正面、本町御門の前に出る。

一方、伝馬橋を渡って城下に入った場合、熱田へとつながる南北の幹線である本町通りとの交差点は高札場となっており「札ノ辻」と呼ばれていた。ここには伝馬会所と飛脚会所も設けられ、地理的にも機能的にも城下往還の中心となっていた。さらにここを東に進むと、城下を東に抜ける駿河街道へつながっていた。

他の橋についてみると、中橋は五条橋と伝馬橋の中間に架けられた橋という意味であり、二つの橋ありきの橋である。納屋橋は城下の中心からはやや南にはずれており、日置橋以南の橋は日置村、古渡村など城下周辺の村のなかに位置していた。実際、各地の旅行記を調べた石田泰弘と種田祐司の研究によれば、名古屋を訪れる旅人の多くは五条橋か伝馬橋を渡って城下に入ったという。

城下町の構造と擬宝珠のある橋

このように、五条橋と伝馬橋は堀川の橋のなかでも、美濃路の起点・終着点として位置づけられる重要な橋であった。もともと清須城下にあった五条橋も、美濃路のなかに位置していた点に注意したい。

また、「五条橋」という名の由来は「五条橋」＝「御城橋」、すなわち

清須城門の橋である(『尾張名所図会』)という説や、元の清須城主斯波氏が京都の五条通りに居を構えたことに由来する(『尾張名陽図会』)といった説が江戸時代からある。いずれも確かな根拠はないが、五条橋を清須城下の象徴、分けても城の入口とみなす意識が反映されている。城下町への入り口となる橋は城への最初の関門でもあると考えれば、清須越しに際してわざわざ擬宝珠を移転した意図も透けて見える。

付け加えると、江戸城下町で擬宝珠が据えられた橋は(江戸城内堀の橋を除けば)、五街道の起点・終着点である日本橋と、東海道にかかる京橋・新橋のみであったという事実も示唆的である。⁽³⁾こうしてみると、美濃路の起点・終着点であり、城下(北御城)の入口たる五条橋と、城下往還の中心である伝馬橋に擬宝珠が据えられたことは、城下町名古屋の構造を物語っているのではないだろうか。

あくまで試論的な問題提起にとどまるが、他の城下町も含めて、擬宝珠のある橋と城下町の構造の関係を、改めて見直す必要があると考える。

註

- (1) 木村慎平「五条橋の擬宝珠はいくつあったのか?」『名古屋城調査研究センターだより』第三号(名古屋城調査研究センター、二〇二二年)
- (2) 石田泰弘・種田祐司「江戸時代の名古屋城と城下町の観光」(『名古屋城調査研究センター研究紀要』第三号、名古屋城調査研究センター、二〇二二年)
- (3) 松村博「ハ論考」江戸の橋 制度と技術の歴史の変遷(鹿島出版会、二〇〇七年)